An abstract graphic design featuring a white background. On the left, there are two vertical bars: a tall lime green one and a shorter purple one. A horizontal blue bar crosses both. To the right, three overlapping circles are drawn with thin lines: a pink one at the top, a light blue one in the middle, and a yellow one at the bottom. The text 'Once Again Advance' is positioned in the upper right area.

Once  
Again  
Advance

## はじめに

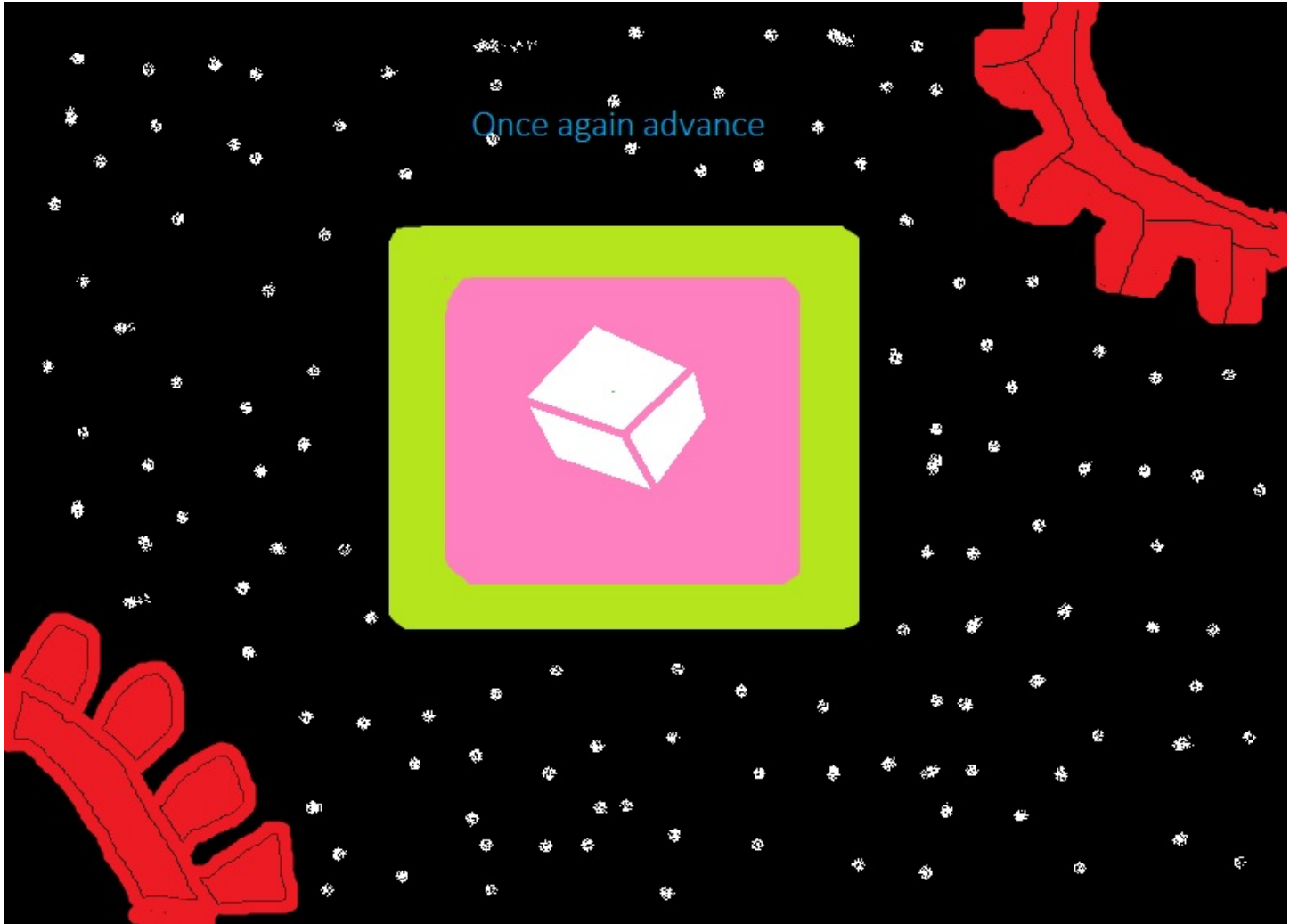
---

こんにちは。って事でわけ分かりにくい話なので解説を。

なぜ解説が必要なのか？それはなんというか話が突飛すぎるからです。

高度な科学技術がある未来世界のお話です。びゅんびゅん宇宙にいけたり意識をインターネットと接続みたいなかんじです（笑。そんな世界は自然が枯渇していき危機に瀕している状態にある訳です。そこで日本はある政策に乗り出します。自然豊かな電脳世界を作り出し現実世界に上書きするみたいな。まあそこからいろいろある訳ですが15才の少年、少女が立ち上がり、電脳世界にとび込みそれから7年後から話が始まります。

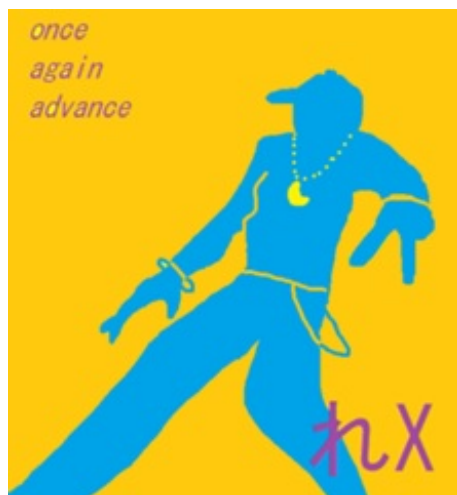
ここまででも頭が混乱しそうです（笑。ぜひ説明会を開きたいものです。



さて、この本での時系列は1000年代となっております。

画像提供（walkさん）

主要人物



## 第1章～なんとなくの世界前線～

---

俺「この世界は…おわりだな…」

れX「あきらめんなよ！まだクリスタル（年金）を組成さえできれば！」

walk「しかし、そんなの古代技術だろ？どうやっていまさら…」

海の樹「み…みつけてきたぞ！」

俺ら「こ…これは古代技術（政策）の理論…?!」

海の樹「これこそが、クリスタル（年金）の組成に繋がる鍵だ…これでようやく天空の塔（スカイツリー）へいける！」

れX「だが俺らは各県の知事戦をくぐりぬけようやく東京まで来たんだ！」

walk「そうだな…死んで行ったみんなの為にも…」

海の樹「ああ…この理不尽な世界の構成点肯定していちゃ未来は生み出せないさ！」

俺「みんな……………よしっ…！これが俺らの真実だ！」

俺「逆境ぐあいがクールだろ?! さあ！ここからが延長線だ！」

## 第2章～天空の塔（スカイツリー）～

---

俺「こ、ここが天空の塔（スカイツリー）か…ホライゾンタワー（東京タワー）よりでかいぞ…」

walk「ああ…610.6mあるらしいぞ…」

れX「そしてここが、この世界を管理している制御プログラム…」

海の樹「ああ。これで本州にかけてのジオフロントも止められるはずだ…！」

橋本知事「つくく。まさか貴様らがここまで来るとは思わなかったよ(´・ω・`)」

俺ら「は、橋本?! 確かにあの時、核爆発で死んだはずじゃ!？」

橋本知事「私だけではないさ、」

松沢成文知事「わたしもいるさ、w」

れX「松沢?! 横浜原発問題で過労死したはず…:」

野田総理 大臣「それだけではない。各県の知事が君たちを迎えにきてくれている。」

海の樹「野田…だと!？」

俺「き…貴様のせいで、ちゃんみつは…! くそやろおおお!」

海の樹「まで! 落ち着くんだ!」

れX「くそやろおお!」

walk「いくな! れX!」

野田「哀れな…コード波多野KNT発動しろ…」

れX「ぐああっああああああX」

俺「…! れ…X」

海の樹「ここは一旦ひくぞ!」

### 第二章補足

ちゃんみつの死因

尖閣戦争（中国との戦争2025～2026）

・政府側と反政府側は手を組んで戦った。結果は勝利に終わったのだが野田の裏切りを受け、ちゃんみつ、来々屋を含む40人が暗殺された。

コード波多野KNT

・世界最悪のチンパンジー。波多野KNTの遺伝子により作られた。兵隊  
・波多野KNT 奥羽山脈にて、バナナにつられ政府側にねがえた。



### 第3章～MIZUTALOID～

---

俺「くそ。どうしたらいいんだ…！」

海の樹「とりあえずなんとか廃電気高路（吉祥寺駅）まで逃げてきたんだが…」

walk「れX…」

俺「とりあえず、あいつを呼び戻そう…」

海の樹「そうだな。ここからは人数と作戦が必要だ」

俺「メールを送った。すぐに来てくれるそうだ。」

walk「とりあえずこのロストシティ（吉祥寺周辺の都市 第一次東京前線で占領した都市。会長のロストテクノロジーによりあらゆる物すべてを遮断した都市、そのため地図から抹消されている。）は安全なはずだ…」

司の光「またせたな…！みんなひさしぶり！ダッシュ！」

海の樹「司の光！ひさしぶりだな！」

俺「で…研究は完成したのか？」

司の光「ああ、ダッシュ！」

walk「だがあまり時間がないぞ…いま橋本率いる維新の会が俺らを探し回っている。」

会長「その前に、僕らも手を打つんだ！」

俺ら「会長！生きてたんですね！」

会長「ああ、あの時。鳥取砂丘に島流しされた僕は、空腹で飢え死にしそうになったんだ。それを水田君が癒し（食料として自分を提供）てくれたんだ。」

司の光「水田…あいつ…ダッシュ！」

会長「海の樹君。僕らが今直面している問題はなんだい？」

海の樹「えと、本州ジオフロント問題と、天空の塔（スカイツリー）、そして何より食料不足…」

会長「そう、食料不足だ。それを僕が作ったMIZUTALOIDが役にたってくれる。」

俺「みずた…ろいど？」

会長「そうだ、これは失った給食室を蘇らせるプログラムだ。」

司の光「給食室の蘇生…つまり電脳回路（産地直送）から国会議事堂に割り込めるかもしれないぞ！ダッシュ！」

walk「希望が…れX…俺。頑張るよ…」



## 第4章～改革～

---

会長「とりあえず、ここにいてもしょうがない。一旦ホーム（品中）に戻ろう。」

俺「ああ」

司の光「ダッシュ…」

海の樹「しかし、戻るたってここは東京だぜ？どうするんだ？」

会長「大丈夫。松屋勝井君が飛行船を作ってくれたんだ。これで戻れる」

司の光「ダッシュ！」

walk「お、おい、この飛行船けっこうでかいぞ！」

俺「さすが松屋勝井だな」

海の樹「おいおい、ちょっとオーバーだろ」

会長「それじゃあ出航だ！」

俺「なあ、会長。ホーム（品中）に戻ってどうするんだ？」

会長「奴が帰ってきたんだ。ホームにある集積回線プログラム室（コンピュータ室）から東京へハッキングをしかけるんだ。」

海の樹「へえ、今度はハッキング戦争か、面白そうじゃないか。」

会長「ああ、まだまだ延長線は終わらないぜ」

## 第5章～code～

---

俺「久々のホーム（品中）だな...」

会長「それじゃ、1時間後にメディアスペース（体育館）に集まってくれ。」

俺ら「了解」

KUTA「みんな！おかえり！」

司の光「KUTA!ダッシュ！」

海の樹「相変わらず元気だな。他のみんなは？」

KUTA「ああ、みんなもう総動員で事に取りかかっているよ。なんせ今回の戦争はでかいからね」

俺「そうか、」

Dyアン「海の樹君！会いたかったわ！」

海の樹「ウホっ♂...じゃなくてよしてくれよ。僕はそんな趣味はない」

Dyアン「うー...」

海の樹「あとで僕の部屋においで（小声）」

Dyアン「gj」

walk「余談はここまでだ、そろそろいくぞ」

俺「おう」

会長「みんな、集まってくれてありがとう。今ここにいる25名のみんなにはこれから集積回路プログラム室（コンピュータ室）に行ってもらおう。」

会長「君たちにはハッキングと伝えてあるが君たちがやってもらおう仕事は実際にはそうじゃない。ハッキングを行うのは鈴木ふく君筆頭に今準備している」

俺「なら俺らは何をするんだ？」

会長「ふふ、みんなも知っての通り、この仮想世界は現実世界の国会議事堂にあるコンピュータ天照によって制御されている。そして定期的にネットに接続し情報更新をしているんだ。」

会長「この世界の季節の変わり目にね。それが明日だ。そこで僕らはオンラインゲームに接続する。なぜだかわかるよね。」

walk「そうか、ここはデータ上の世界...」

海の樹「オンラインゲームから武器、軍隊、食料をデータ媒介して無理矢理持ってこれば...」

会長「そう、今が立ち上がる時だよ。」

## 番外編～循環不安～

---

いつも通り目覚めた俺は、いつものようにテレビをつける。かれこれ10年近くこのいつも通りを繰り返していると無意識でやってしまうほどに習慣づいている。ただ、その日にかぎってカラスがうるさく鳴いていたっけな。朝ご飯はいつも食べない。そうしないと1ヵ月の食料が持たないから。強いていうならミルクティーを一杯飲む事くらいか。眠気が残っているのかふらつきながらリビングのソファに腰を落としテレビのお天気のお姉さんの声に耳を傾ける。

「今日は晴れか...」

お天気のお姉さんに相づちを打つように呟いた。これは言うも通りではないぞ。まだ頭の半分は夢の中にいるんだ。天気コーナーが終わり、占いコーナーに移ろうとした瞬間、画面が途端に切り替わった。映し出されたのは17才くらいの好青年。この国の天皇だ。何でも、ものすごく頭がいいらしく、すぐにすべての答えが出てしまう人らしい。関心するねえ。

「日本再生政策を行います。」

と天皇は話した。おいおい、挨拶もないのか。そんなことよりも日本再生政策ってなんだ？勝手にやっておけよ。俺にとっては占いの方が大事なんだ。10秒ほど間が相手から天皇はまた口を開いた。

「我々が今大変な状況にあることはみなさんも知っているはずですよ。科学技術が発達しすぎた故の環境問題。地球全体の資源の枯渇。これを解決しないと日本、いや世界は終わってしまうことは皆さんも知っているはずですよ。」

確かにそうだ。しかしこんなものつい最近始まったものでもないだろう。今更なにをしようがこの国は終わるべきときに終わるさ。そんなことを思っていると天皇はこんな事を言いだしたんだ。

「そこで我々はリスタリア理論を確立させました。ざっくり丸め込んで説明いたしますと、ゲームの初期化と考えてください。自然豊かな日本を電腦世界で作り出し、それを現実世界の日本に上書きをして行くのです。それこそが日本再生政策です。」

へえ、がんばって貰おうじゃないか。それでまだ数年でも多く生き残れるならな。

「皆さんは何も心配しなくてもいいのです。なぜなら」

その一言だ。その一言で俺らの人生は狂った。

「なぜなら再生後の日本に貴方達はいませんから。」

それから、訳あって俺ら中学生は電腦世界に日本、いや家族を守るため。電腦世界上に飛び込んだんだ。

## 第6章～45度の先へ～

---

### 統括者の日記

目まぐるしくもない、そんな日々を繰り返す。

自分の存在理由を考えていた。今のこの国は怖いくらい衰退し安定していて、僕の国について考える役目も何も残っていないようで。考えればすぐに答えの出してしまう僕の頭では、存在理由なんて1%も残っていないとあざ笑う。「そんなことはないよ。」言ってくれたのは君だった。それからいつも隣りにいてくれたのが君だった。ここから飛び降りた君は何を思っていたのだろうか。いくら考えても答えが出なかった。

こんな未来は、幻想だ。きっと君を連れ戻してみせる。たとえ、

たとえ、君の国民を殺してでも…

-----

-----

会長「いいかい？僕が合図したら現実世界のネットワークに接続し、PS0のデータを奪う事が第1目標。そしてすぐさま、この世界への再現。そこからPS0にあるクラッドに乗って東京へ向かう。」

俺「おう」

海の樹「クールにいこうぜ」

司の光「ダッシュ！」

walk「腕がなるな！」

## 第7章～レベル48～

---

鈴木ふく「ん、会長からの連絡がきたぞ！」

サマロヒ「へへ、腕が鳴るな」

グランド「さあ、いっちょやってやるか！」

鈴木ふく「ハッキング開始だ！」

同時刻—天空の塔—

松沢「野田さんっ！天空の塔（スカイツリー）の電腦回路（エレベーター）が何者かにやって乗っ取られました！」

野田「なんだと。今すぐ電腦回路（エレベーター）取り戻すんだ！このままじゃ日本が...。」

蓮舫「切り捨てればいいんですよ...そんなもの」

松沢「蓮舫！貴様なんて事を！」

野田「まあ落ち着け。話を聞こうじゃないか」

蓮舫「電腦回路（エレベーター）が乗っ取られた所でできる事はたかこの世界の季節更新を遅らせるだけ、問題はないでしょう」

野田「たしかにな。だが相手のネット接続はこちらにとって予想外の事があるやもしれん」

橋本「それなら私にお任せください。やっと完成しましたよ、48がね」

野田「そうか、それならば君にまかせるよ。頑張ってくれたまえ」

橋本「お任せを。」

グランド「へへっ順調！」

サマロヒ「ああ、この調子でいけば余裕だな」

鈴木ふく「お、おい待てよ。なんだ...あれ...」

橋本「驚くがいいガキ共。これが真実だ。我々維新の会が造り上げた電磁破壊プログラムの完成形。これが...」

鈴木ふく「これは...一体...どういうことだよ。」

橋本「これがKNT48だ！」

## 第8章～方舟～

---

俺「よしっネット接続完了だ」

会長「うん、それならこれからPSOに接続してくれ、僕はSEGAの社長と交渉してくるよ」

海の樹「了解」

walk「PSO内のユニバース1 データコピー完了しました！」

KUTA「今この世界に合わせてデータを媒介している！コピー完了したところからこちらに送ってくれ！」

司の光「ハッキングの方も順調みたいだなダッシュ！」

俺「一応すべて完了したな。結構早く終わったみたいじゃないか」

会長「それはMIZUTALOIDのおかげだよ。クリスタル（年金）を使ってネット世界を一時的に加速させたんだ。」

俺「水田...いや、ポーク。よくやってくれた」

KUTA「こちら準備完了だ！あとは会長がエンターキーを押せば構築されるぞ！」

会長「ああ、いくぞ。改革だ」

walk「ん、なにもないぞ...」

会長「外みてみなよ」

俺「で、でけえ...」

海の樹「これは。白いルービックキューブ？」

KUTA「いや、ちがう、この中に今日コピーしたすべてが納められているコア（新党）」

会長「そして、これが移動手段となりホーム（品中）に変わる第二の拠点。名付けて方舟だ」

司の光「ん。おいっ！あれはなんだ？！ダッシュ！」

俺「大量の軍...勢？いや猿？」

会長「きたか、嗅ぎ付けるのが早かったな、橋本」

walk「コード波多野KNTかつ！」

## 第9章～上京～

---

KUTA「KNTのバナナ活動（浸食）によって右翼システムが浸食されているぞ！」

俺「く、どうしたらいい?!」

海の樹「このままじゃ東京に行く前に落とされてしまう！」

会長「まあ、落ち着け…」

司の光「会長そんなこと言ってる場合じゃ…ん? どういうことだ? KNTのバナナ活動（浸食）が止まった?! ダッシュ！」

グランド「ここは俺たちが食い止める！」

鈴木ふく「先にいけ！」

walk「お前ら…」

会長「つっきるぞ！」

同時刻

野田「おい、振り切られたようだぞ」

蓮舫「ふふ、いうまでもないわね」

松沢「まあ予想はできたがな…」

阿部「貴様はしばらくひっこんでるんだな、はしもおとお」

橋本「はい…すいません。。。。。。くそガキどもめ…（ボソッ）」

司の光「見えてきたぞ! 東京ダッシュ！」

会長「よし、ここからは僕は別行動に入るよ。確認したいことがあるんだ。」

KUTA「何しにいくんだ？」

会長「少し、哀れな道化に挨拶をね…」

俺「道化? きいた事がないな」

会長「心配しなくてもいいさ。君たちはこのまま天空の塔（スカイツリー）に向かってくれ。」

walk「わかった。気をつけてな」

会長「ああ」

サマヒロ「ぐああっああ！」

鈴木ふく「サマヒロ?! だいじょ…う…?! グはっ」

グランド「ふく?! うっ…き…さま…は」

橋本「世話焼かせやがって…もう我慢できねえ。この俺の手で殺し尽くしてやる。」





「命を蘇生する方法はないか？」

そう聞かれたとき。僕はびっくりしたよ。  
だが僕も一応科学者の端くれだ。興味があるじゃないか。

「不可能じゃないと思うね。少なくとも机上論では。」

そうだ。机上論だ。蘇生はできる。自身がある。  
だがそれには多大な他人の命を奪わなければならない。  
もちろんその事は説明したさ。僕も一応人間の端くれだ。

「かまわない。やってくれ。どうせ終わる世界だ。」

おもしろい人じゃないか。国民の頂点である人が国民を売るとは。  
しかも1人の小娘のために。くく、我ながら傑作だな。いくら天才的な頭脳を  
していても所詮は子供か。

「いいだろう。引き受けた。」

「頼んだぞ。Chairman。」

。僕は仮想世界を造り上げたんだ。

## 第10章～Choose "ONE"～

---

俺「んじゃ、まあ行くか…」

KUTA「ちょっと待て、このまま行くつもりか？」

司の光「どういう事ダッシュ？」

KUTA「リーダーがないんじゃ、全体の指揮が下がる。ここで一つ代理を立てようじゃないか」

全員「……。」

俺「なら、俺がやる！」

KUTA「いや待て、ここはやっぱり俺だろう？」

海の樹「いやいや僕がやるよ」

司の光「お前なんかより俺に任せろダッシュ！」

ノシヨスケ「いやいや、ここは今まで雑用をやらされていた俺だろう？」

walk「な、なら俺がやる！」

全員（walk除く）「どうぞどうぞ！」

walk「う、う、うわーん」

俺「あーあ、泣かせちゃった～」

KUTA「まあ冗談はおいといて。」

海の樹「お前ら、おふさげはいい加減にしろ。ここは僕がやるよ」

全員（海の樹除く）「……。」

司の光「定員1名のうち1名が立候補しています。立候補者の海の樹君どうぞ、ダッシュ！」

海の樹「僕は会長代理に立候補した海の樹です。みなさん、知っていますか？この方舟内にもうゴミが落ちています。みてください。カイロが落ちていました。いくら電脳世界だからといって、やっていい事と悪い事があります。そこを僕は改善して行きたいと思います。そして、僕が会長代理になったら“即決力”をもって進撃して行きたいと思います。どうか、海の樹に清き一票を」

—投票後—

司の光「会長代理はwalkにやってもらう事に決定しましダッシュ！」

全員「ばんざーい」

海の樹「う、う、うわーん」

## 第11章～ハンバーガー10個分くらいの勇気～

---

KUTA「ん、電話か。はい。もしもし？はい。了解しました。」

walk「誰から？」

KUTA「会長からだ。天空の塔の方は会長達が押さえてくれるから、ワールドエンド（国会議事堂）に向かえとの事だ。」

俺「ついにワールドエンド（国会議事堂）に乗り込むんだな。」

海の樹「未だかつてあそこには足を踏み入れた事がないからな。緊張するね」

司の光「つまりこれが最後の戦いになるって事ダッシュ」

walk「よし、方舟を東京都千代田区永田町1丁目7-1に転送させるぞ！」

ノシヨスケ「了解！」

同時刻—天空の塔—

野田「ふー、いい湯だった。さて、とりあえず橋本にでもハンバーガー10個分くらいパシらせるかな。おい！橋本！」

野田「おかしいな、すべて探したつもりなんだが蓮舫もいないぞ。ハッ？！まさか俺の部屋のペロンチーノを？！」

野田「おい！貴様ら！何を...し...て？ 蓮舫？！ 松沢？！ 死んでやがる。」

野田「?!。あ、 貴方がっ...なぜこんな所にいらっしゃるのですか?!」

俺「これが...ワールドエンド（国会議事堂）への転送門。最後の門。。。」

walk「さすがにでかいな。ハンバーガー10個分くらいかな」

海の樹「会長“代理”。馬鹿ですか？」

司の光「この戦いに勝てば俺たちは帰れるんだな。ダッシュ！」

KUTA「ああ。ちゃんみや家族を救えるんだ。そして僕は、来々屋に僕の気持ちを伝える。絶望的にかっこいいぜ！」

海の樹「僕だって、Dyアンやサマヒロ。ヒロカズが待っているんだ。」

俺「くそ、リア充め！」

walk「まあ落ち着け。さて、最後の戦いだ。ワールドエンド（国会議事堂）は俺が一步も足を踏み入れていない未知のもの。城か、都市か、塔かわからない。だが最深部には必ずこの世界の首謀者がいる。気合い入れてこーぜ」

全員「おう！」

海の樹「なら、扉明けますね」

## 第12章～ワールドエンド（国会議事堂）～

---

俺「す、すげえ。ここがワールドエンド（国会議事堂）の中なのか」

司の光「おい！外みてみるよ！ダッシュ！」

海の樹「空に...浮かんでる...」

KUTA「なんか...神々しいな...」

walk「とりあえず...奥へ進んでみるか。」

司の光「そうだなダッシュ！」

俺「だいぶこのほかでかい廊下を進んだんだが...終わりあるのかよ」

海の樹「そうだな。漫画でよく言う無限ループみたいだ。」

KUTA「しかしすげえな、本当にこの世の物かよ。光る宮殿みたいだ。美しすぎる」

walk「おら、何してる、出口だぞ」

司の光「?! 誰かいるダッシュ！」

鳩山「待っていたよ。少年達」

walk「貴様がこの世界作ったのか？」

鳩山「いやいや、僕ちゃんはこちらを守っているだけさっポー」

KUTA「ならば消えてもらおうか...！」

鳩山「消えるっポー？笑わせるなっポー。ガキ共！くらえ、人体溶解光線銃！っポー」

ノシヨスケ「危ない！！」

KUTA「ノシヨスケ?! お前いたのか?!」

ノシヨスケ「こっそり...つけて...きたんだ...たのむ、世界を...」

KUTA「ノシヨスケー!!!」

鳩山「素晴らしい友情だっポー。で、次は誰っポー？」

司の光「俺が行くダッシュ！」

俺「お前...」

鳩山「ふふ、来るっポー」

司の光「変な語尾つけやがってダッシュ！ いくぞ！ ダッシュ！ダッシュ！」

鳩山「なにっポー?!」

俺「司の光が...消えた？」

海の樹「ちがう。走ってるんだ。そうか。君は知らなかったね。司の光は常に語尾にダッシュをつける事で自分の力を抑制している。それがダッシュを2回言う事でリミッターが外れ、光をも凌駕する。」

鳩山「そんな馬鹿な?!」

司の光「これが世界の一撃だ！！」

## 第13章～Emperor～

---

俺「す、すげえ...一撃で倒した...」

司の光「へへ、どんなもんよダッシュ！」

walk「さすがだな。行くか。この階段の上が玉間っぽいしな」

鳩山「ぐ、し...しかし...鍵が必要だっポー...」

walk「鍵ってこれだろ？知ってるよ...それぐらい」

鳩山「な...ぜ...確かに僕ちゃんの懐に?!」

海の樹「walkは“目”を持っているからな。何処に隠しても無駄だよ。」

walk「おしゃべりがすぎた。いくぞお前ら。KUTA。鳩を消せ。」

KUTA「え、walk。キャラ変わってね?まあ殺すけど」

海の樹「目を使った代償ってトコだな。」

鳩山「ふふ、ならば上るがいい。リス...ぐへえ...」

KUTA「ここが...最後...扉。」

司の光「この扉の両端に立ってるの...女神像か...ダッシュ!?!」

walk「いいから、開けるぞ。」

司の光「広い部屋だな...ダッシュ!。しかし何もない。」

KUTA「おい!前見てみろよ!」

天皇「ようこそ。ワールドエンドへ。」

俺「天皇...」

天皇「ふふ、不思議な巡り合わせだね。年もさほど違わない僕たちが国の運命を今決めようとしているだなんて。」

walk「ふざけるなよ天皇。お前はどれだけの人を犠牲にした。」

天皇「君は。いままで食べたパンの枚数を覚えているのかい?」

司の光「貴様あ!!ダッシュ!」

天皇「ははは。冗談だよ。糧となってくれる人たち。127,817,199人すべて記憶しているよ。そして、感謝しているよ。」

海の樹「感謝だと...?!」

天皇「それより君たち。背中。がら空きだよ?」

全員「?!」

橋本「死ねええ!!!!糞ガキ共!!!!!!!」

KUTA「橋...\_\_!」

橋本「ぐえ?!」

俺「消え...た?」



海の樹「は... 会長！来てくれたんですね！！」

会長「ああ、ごめん遅くなっちゃったね」

俺「もう怖いもの無しだな！」

会長「君が天皇か。君の目的は天空の塔で野田から聞かせてもらったよ。君は日本のためなんかじゃない。」

会長「“アノ”ためにこんな馬鹿げた事をしているって事もね。」

## 第14章～ANO～

---

walk「アノ...？」

KUTA「誰だそれ？聞いた事ないな。」

天皇「そう、アノ。僕に夢を教えてくれた人。彼女の蘇生こそ僕の真の目的だ。」

俺「その...ためにみんなは消されるのかよ!？」

天皇「人間が悪いな。それが日本にとっても最前の策である事には変わらない。そうだろう？

海の樹君」

海の樹「くっ...」

天皇「君は僕に一番近い存在だと思っている。いくら綺麗事を並べたって、最前ではない事は君の脳が一番よくわかっているはずだ。」

walk「どういう事だ？海の樹」

海の樹「僕の能力”イコール”についてはみんなの知っての通りだ。あらゆる現象、数式、状況に対して答えが確実に出せる。察するに天皇は僕より強い力を持っている。そこから出た答えは絶対。それが真実なんだ。」

KUTA「つまり。アノが復活し、日本を1からやり直す事が世界の維持。資源不足で停止になった”地球創造計画”にもつながるという事か。」

会長「まあそういう事だね。それまでには細かい段階があるのだろうけども彼、天皇にとってはなんともないだろうね。」

天皇「知ったような口を聞くじゃないか。」

会長「ふふ、わかるような気がしたんだよ」

司に光「ちょっと待てよ!! そんな事はどうでもいい!! どうやって人を生き返らせるんだ?! 気になってしょうがねえ! ダッシュ!」

海の樹「お前なあ...」

天皇「簡単だよ。器と具を作って合体させればいいんだ。器。そう、NOA(肉体)は簡単に作れる。」

海の樹「問題は具。つまりNAO(魂)の方か。」

天皇「そう魂。それこそがこの計画の目的。国民を犠牲に1つNAO(魂)を完成させる。そしてNOAとNAOの合体により...アノは復活する。」

俺「...そんな事が...」

天皇「で、君はいつまでそちら側にいるのかな? Chairman。」

walk「Chairmanだれだ...それ？」

会長「そうだね。そろそろ遊びもおわりにしよかみんな。」

KUTA「会長?!...ぐああっあ!」

俺「KUTAが...消えっ...?! どういうことだ会長?!.....なっ?!」

海の樹「足が?!」

walk「動かない...?!」

会長「どうにもこうにも、そういう事さ。僕は天皇に仕える科学者Chairman。そしてこの世界の創造主だ」

# 最終章

～Once again advance～



ANO

## 最終章Once again advance ① ~創造主~

---

会長「どうにもこうにも、そういう事さ。僕は天皇に仕える科学者Chairman。そしてこの世界の創造主だ」

walk「なん...だと...」

海の樹「くっ... なるほどな...さしずめ尖閣戦争でちゃんみつの死ぬ直前の不可解な会話の相手の正体は貴様の事か。」

chairman「さすがだね、海の樹。ご自慢の"イコール"は健在という訳だ。」

海の樹「自慢じゃないけどね...ましてやこの状況だ。体が動かないんじゃ何もできない。」

俺「くそっなんで動かないんだ！！」

chairman「そんなの簡単だよ。言っただろ？僕がこの世界の創造主。神だ。」

KUTA「神に逆らう事はできないってか！？」

chairman「そういう事だね。僕にあらがう事は決して許されない。」

司の光「ふざけるな！！ いくぞ！ダッシュ！ダッシュ！」

俺「司の光が動いた！！？」

chairman「ふむ、光を超える事で"静止の命令"にそむいたか。」

司の光「くらえ！！」

chairman「なら、君は消えてもいいかな "消失"」

司の光「?!」

walk「よけろおおお!!!!!!!」

chairman「無駄だよ。僕の命令は絶対だ。」

KUTA「司の光が...消えっ」

walk「くっ...」

天皇「chairman。茶番はもういいか？そろそろ始めたいんだが。」

chairman「ああ。でもね、天皇。異端分子はすべて削除しないとイケないんだよ。」

天皇「何を言ってるんだよchairman。動きを止めているんだ。もう何も彼らには何もできないよ。大体.....!!!??」

chairman「何を言ってるんだか。君もだよ天皇。君も消えるべき存在だ。」

天皇「なっ...」

俺「おい、どういう事だ？」

walk「わからん。だが...」

KUTA「相当やばい状況なのは確かか...」

海の樹「く...」



## 最終章Once again advance ②～リスタリア～

天皇「貴様...裏切ったな！」

chairman「裏切る？馬鹿な。僕は最初からこのつもりだったよ」

walk「会長。あんた」

chairman「安心してくれよwalk。君たちに最高のshowを見せてあげよう。」

俺「なんだ...？地面が崩れて行く...？！」

KUTA「...！」

海の樹「ここは...宇宙か...？」

天皇「く...」

chairman「そう、ここがこの世界のすべてだ。万物のすべてを司る場所。、"リスタリア"。昔の人々は"星の記憶"と呼んでいたらしいけどね。それをこの世界上に造り上げた。」

俺「どういう事だ？」

天皇「何でもできるという事だよ...。宇宙の操作、タイムリープ、そして。人の蘇生も...」

KUTA「それって...ならなんで国民が犠牲に...」

chairman「簡単さ、このリスタリアを動かすのに必要な生け贄って事だよ。」

walk「おい、お前の目的はよくわかった。だから一発殴らせろ」

chairman「ははは。動けるものならね」

walk「く...」

chairman「あはは！無理だね。無理だろうwalk!!そこではいつくばって今からおきる事をここでみているよ」

天皇「chairman。貴様は何が目的だ。」

chairman「決まっている。科学者の最大の目的。宇宙の探求さ。」

海の樹「理由はわかったが科学の段階では宇宙をしる事はできないと思うよ。会長。」

chairman「ふふ、君に言われると不安になるけどね、それを可能にする為のリスタリアだ。」

天皇「まさか...貴様っ...そんな神じみた事をやるつりなのか?!」

俺「どういうことだ？」

KUTA「俺らには到底理解できなさそうだな」

walk「話きいておこうぜ」

chairman「単純だよ。知っているかい？この地球で日本以外がすでにジオフロントにより消失していることを」

海の樹「なるほど...地球を犠牲にしなければならないほどの事をしでかそうとしている訳か。」



chairman「さすがだね。僕の目的は宇宙をもう一度やり直す事。Re start だ。」

俺「なるほど...だからリスタリアか...」

chairman「そう、そのためには宇宙を一度終わらせる必要がある。そして今度はもう一度僕が神として宇宙始める。そうすれば僕はすべてをやる事ができる。万物創世だって手につかめる力だ。」

天皇「そんなことの為に...くそっ...!! ごめん...アノ...」

chairman「ああ、心配しなくとも約束通りアノちゃんは蘇生させてあげるよ、僕も人だ。ただし、世界を終わらせる”爆弾”としてね。」

天皇「な...!？」

walk「なんて事を...」

KUTA&俺「言いたい事はそれだけか？」

chairman「ああ。すんだよ。何かするつもりかい？」

俺「なあKUTA。会長の言ってる事分かった？」

KUTA「おうまったくわからん。だが俺たちの敵だって事はよーく理解したぜ。」

俺「ならま、とりあえず」

KUTA「一発なぐっておくか」

海の樹「おまえら!？」

俺「会長代理。あとたのんだぜ」

KUTA「会長代理。ちゃんみつが作ってくれた愛のお守り。貴方に託します。」

walk「何を言って...なっ...」

chairman「な...なぜ動ける?!」

俺「ん〜、なんでだと思う?KUTA?」

KUTA「そうだな、科学じゃ証明できないパワーってところかな」

chairman「へえ。消える覚悟はできてるんだね。じゃあ消えろよ。」

俺「やってみろよ」

chairman「体が動かない?! なぜだ!!!」



俺「教えてやろうか？」

KUTA「お前の体が動かない理由」

chairman「くっ...き、聞かせて貰おうじゃないか。」

KUTA「後ろ。見てみろよ」

chairman「お前は...?! MIZUTALOID?!」

MIZUTALOID「オデを忘れてもらっちゃあ困るね会長Boo？」

chairman「貴様は確かに鳥取砂丘で上手に焼いて食べたあと電脳体にして自爆させたはず...?!」

MIZUTALOID「まあな。だがあんたの間違いはオデを電脳体にしたのがまちがだったんだBoo。電脳体になったオデは養豚場（現実世界との接点）から現実世界に帰還したちゃんみつや来々屋と会話したBoo。そこですべてを知ったBoo。」

chairman「そんな事は計画通りだ！わざと養豚場にいかせ現実世界と関わりをもたせ消えて行く世界を電脳世界を通じながら消えて行く恐怖を味合わせ国を混乱させるのが目的だったんだから！そして最後にお前の爆死を日本のあらゆるモニターでうつしたはずだ！」

ちゃんみつ「簡単さ。爆ったのがMIZUTALOIDではなくただの豚だったって事だ。」

KUTA「ちゃんみつ!!?どこにいるの?!」

ちゃんみつ「悪いが現実世界からアクセスしてるから声だけだ。ごめんよ♂」

chairman「おまえかっ...」

ちゃんみつ「尖閣の時はどうも♂まさかあんなに早いリタイアをするなんて思ってもいなかったぜ♂」

chairman「リタイア...つまり君は現実世界で生き延びている...か。なぜ生きている？」

ちゃんみつ「来々屋のおかげさ」

海の樹「来々屋！」

chairman「そうか...確か彼は”シャッター”すべてを遮断する能力を持っていたね。だけど所詮は外の世界からだろ？君たちには何もできない。」

俺「えーと。。なあ？KUTA」

KUTA「ああ、そうだな。」

俺 KUTA「だから俺らが殴るんだよ！」

chairman「ゴフッ!!!...きさまらあ！消えろおお！」

海の樹「よけろお！」

俺「よけられねえぜ」

KUTA「ここで逃げたら...ちゃんみつ達がつないでくれたのがダメになっちゃう」

海の樹「お前らの言ってる事がわけわかんねえよ！」

KUTA「そのうちわかるさ、また会おうなちゃんみつ！」

ちゃんみつ「ああ♂ありがとう」

chairman「”消失”!!!」

MIZUTALOID「じゃあ！後は頼んだBoo!

ちゃんみつ「またな」

俺「あとは頼んだぞ」

海の樹「あいつら...何がしたいんだかさっぱりわからん。まったく丸くおさまらねえよ」

walk「いや、感謝するべきだよ。」

chairman「今度は君か。そろそろ茶番も飽きてきたよ...なあ天皇？」

天皇「く...」

## 最終章Once again advance ③～ぬくもり～

---

chairman「はははこの僕が終わり？何いってるんだ！何も力も持たないくせに！へーへー吹くならファンファーレってね」

walk「いいやおまえ終わりだよ。」

chairman「何を言って...?! ぼ...僕の足が?!何をしたああっあああ!!!」

walk「なにもしてないさ...」

walk「さっきKUTAが残したこのお守り...なんだかわかるか？」

chairman「これは...?なんだ...?」

walk「わからないだろうね。会長には」

海の樹「これは...まさか?!」

天皇「そう...アノのNAO(魂)だ。」

chairman「しかしなぜ?! なぜそんなものでこの僕が?!」

walk「あのお守りの中身。それはリスタリアを動かす為の糧。」

海の樹「つまり...ちゃんみつ達は...世界をすくためにリスタリアに生け贄となりアノを蘇らせ...

そしてアノをこの世界の神とすることでこの世界の権限をアノに移した...!」

天皇「それだけじゃないよ。さっきあいつに消されたKUTA君達もだ。」

chairman「なぜだ。なぜKUTAがそんなものを持っている?!」

walk「簡単だよ。会長。あんたが裏切っていたってことは尖閣で死んで行った仲間がよく知っている。現実世界で何もできない訳じゃない。多分リスタリアの事を知ったんだ。そして、ジオフロントによって命が消える時。お守りに死んで行ったみんなは俺たちにNAO(魂)をゆだねた。」

chairman「馬鹿なっ...!こんな事が!?!」

天皇「...アノ...」

アノ「天皇...久しぶりだね。また会えたよ...!」

天皇「ああ...久しぶりだ。ずっと。がんばってきたよ。」

chairman「笑わせるな!消えろおお!」

海の樹「おい!あいつの手に持ってるのって!SSPNランチャーじゃないのか?! 星が吹き飛ばぞ?!」

walk「大丈夫だ。」

天皇「アノ...」

アノ「うん。わかってる。」

chairman「URYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYYY!!!!」

アノ「消えて!!!!」

chairman「ぶぐへあ!?!」

## 最終章Once again advance ④～終わり～

---

walk「終わったん...だな...」

天皇「ああ...いろいろすまない。」

walk「いいさ、全部会長が悪いんだ。」

海の樹「ちょっと...まってよ...今外の世界ってどうなってるの？」

アノ「えと...ちょっとまずいかもだよ。地球上で東京以外すべてロストしてる...」

天皇「そう考えると、戻るのはまずそうだな。」

海の樹「そうですね」

アノ「どうするの？」

walk「もう一度地球全体に上書きすれば...！」

天皇「残念ながらそれは無理だ。」

アノ「できるよ...！」

天皇「おい、アノ！」

アノ「いいの...天皇。この星をすてればいいんだよ！」

walk「は...？ 頭大丈夫？」

アノ「馬鹿じゃないもん！！ 確かにテストの点数は.....ぶつぶつ」

海の樹「で...それは得策なの？」

天皇「ああ、この世界はすでに上書きされているため電波に汚染されている。そう考えてくれ。そう考えると2度目の上書きは確実にどこかで支障をきたす。だが他の惑星に上書きすれば話は別だ。」

海の樹「なるほど...」

walk「ふむ。これぞ再生政策って感じだな。してどの惑星にするよ？」

天皇「太陽系でいくと、"水金火地木土天海"とならんでるわけだから火星が妥当だろう。」

アノ「さすが！頭いいね♪」

海の樹「だが...それにはリスタリアを動かすんだろ？」

天皇「ああ...3人...必要だ。1人がイケニエとなり2人が操作し永遠という時の中でリスタリアの維持をしないといけない。」

walk「なら...！！」

海の樹「僕がイケニエになります。代理はひっこんでいてください。」

walk「海の樹...」

アノ「じゃあ私達がリスタリアの維持にまわるね！」

天皇「ああ」

walk「お...俺はどうしたら...」

海の樹「おとなしく新世界できままに任せよ。またな。ありがとう」

walk「海...！！」

アノ「じゃあ...いくよ...！ リスタリア起動ー！」

天皇「またどこかで会おう！walk君。」

アノ「またね！」

walk「おい、みんな...またひとりぼっちかよ。またかよ。またニコ厨ライフが始まるのかよ。いやだよ、そんなの。」

そして

---

あれから1年すぎた。だいぶ僕もこの世界に慣れてきた所だ。アノさん達が上書きした世界は、今までと違いたいした科学力もなく、なんの力も持たない人ばかりだ。そして、それが正しい選択だと僕は思っている。そして海の樹やKUTA...いや、この世界では”海樹”と”たく”達は、過去の事を何も覚えていないんだ。そうだ。太陽系も変わったんだ。”水金地火木土天海”になった。年号だって2000年代になったんだ。ちなみに今年は2013年。時々まだ1013年とか言っちゃってみんなに笑われてしまう。そんなとき僕は悲しくなるんだ。誰一人として。あの時にの事を覚えていないんだなって。それでも前となんら変わりなくみんなは話しかけてくれる。

「よお！あゆみ！おはよう！♫」

この声はちゃんみつ...いや水野君だ。ちなみにあゆみっていうのはこの世界での僕の名前だ。

「お、二人そろってらぶらぶか〜？」

後ろから出てきたのは寛人。あっちではKNTの人。

「ばーかちげーよ」

「そうか残念だな♫」

そんな日々を送っている。楽しい毎日だよ。

「なあそういや知ってるか？火星に生命がすんでいた後があったんだって！」

「ははは、そんなのガセだろ？」

「なんだよ、あゆみ。つまんね一の。」

ためらったりしない、過去に地球だった火星の役割はもう終わったんだから。そして火星にいる天皇とアノ産を見つける事は今の人類では到底無理だ。今この世界は本当に楽しい。人のぬくもりをかんじる事ができる。

「お。きたぞ！おはよー！」

前方に待ち構えていたのは、レックス（れX）光司（司の光）だ。

友情は健在なわけなんだ。

「なーレックス、お前市内統一テスト何点だった？」

「うわっ?!いまそれ聞くか?!」

「あててやろうか28点!♫」

「馬鹿かよ水野よ!12点が妥当だろう?」

「おい!人のプライバシーを侵害してはならんぞ!」

「知る権利ってのがあってだなあ...」

「あーでたよ海樹のうざいところ〜」

「なんだと〜!?!」

こんな馬鹿みたいにさわぎながら、僕は今日も。

学校への、この坂を上っている。

人は時に立ち止まる時もあるだろうけど。次に歩き始める時は新しい世界がまっているはずだから。

Once again advance.もう一度、歩き出そう。



海の樹さん提供番外編。

～孤島にて花と散る～

今年は1025年。その日は気味が悪いほどの快晴だった。普段なら、晴れ渡った空を見ると、清々しい気分になるのだが…、弾丸が頭の上を飛び交うこの状況では、そんな感覚に浸ることなどできるわけもない。そう、ここは戦場なのだ。

本部「…ちゃんみつ、今は耐えるんだ。相手の弾をできるだけ使わせて、そのあと反撃に移る…」

トランシーバーから微かに聞こえる。いや、ほとんど聞こえないと言う方が正しいだろう。

ちゃんみつ「了解」

そう返したものの、ただ砂を積んだだけのこの防弾壁がそれまで持つとは思えないがな。

ああ、あいつらはまだ生き延びているのだろうか。これが終わったら、またみんなで佐久島にも行こう。潮干狩り、キャンプファイア、あれはたのしかったな。って、戦場で何を言っているのか。そんな自問自答を繰り返していた。

そんなときだった。突然訪れた静寂。相手の弾が底をついたらしいな。とすると、たまの補充に約30秒は時間がある。攻めるなら今しかない。

ちゃんみつ「水野3等兵、これより奇襲に移る」

本部「…了解…武運を祈る…」

学校を今まで率いてきた彼の言葉はとても安心できた。そして俺は防弾壁から飛び出した。刹那、俺は啞然とした。大勢の兵が銃口を向けていた。それも、政府軍ではないか。

そしてその先頭に立っているのは…

ちゃんみつ「橋本！貴様、なぜ裏切った！」

橋本「あの方からの要望なのでね」

ちゃんみつ「あの方って…誰だよ！」

？「僕だよ」

橋本「chairman様、こちらは危ないかと思いますが」

chairman「構わないよ。彼は友人だから、僕を撃ったりしないよ」

兵の影から出てきた一人の少年。その姿に、とてつもない絶望を感じた。

ちゃんみつ「なぜだ！なぜ裏切った！」

chairman「裏切ってはいないよ。最初から僕はこちら側の人間だ」

ちゃんみつ「なんだと…この、くそかい…」

パーン。その瞬間、弾丸が俺の胸を貫いた。

chairman「知らんな。僕はchairmanだ」

時系列

1015年 ジオフロント計画が秘密裏の会議で議決。

1016年 政府は外交を一切遮断。日本に滞在する異国人を帰国させる。（第二次鎖国）

1017年 ジオフロントを国民に発表。大きなデモや反乱が起こる。（反政の乱）

1018年 仮想世界の完成。東京に国会を中心とした巨大な壁が出現。（ジオフロントによる物だと思われる。）

1020年 中学3年生（約90人）が世界を救うため仮想世界への突撃。



1021～

1024年 中学生と各県知事達との交戦 一回目の東京突撃（第一次東京前線）

1025年 仮想世界に忍び込んだ中国との戦争（尖閣戦争） 中学生は政府軍に大量暗殺された。

1027年 俺 海の木 walk れXが東京突入  
れX死亡  
ワールドエンドに突撃

1028年 元旦 アノにより世界が終わる。

---

---

2012年 火星だった星を地球として新たに歴史を刻む。

## 海の樹茶番2

番外編 ～汝の魂が為に（天皇偏 第三者目線）～

「さて、昔の話をしよう。これは、過去の話だ。」  
日本国の象徴たる彼はそう始めた。

「私は普通の学校に通っていたが、普通の人とは違った。個性を越えた何かを持っていたんだ」  
僕は相づちを打つこともなく、ただ、彼の話聞いていた。

「それ故にほとんどの人からは理解されなかった。いや、ほとんどの人は理解しようとしなかったのだ」

彼が普通ではない。それは確かに感じていた。しかし、それが昔からだと聞くと、何と言って良いのかわからなくなった。

「学校の生徒たちからは苛められ、大人からも嫌悪の目で見られ、拳げ句の果てには親にまで嫌悪された。そして私は家を出た。人間との接点を次々に捨てていった。その後、私は一人になった。誰とも話さず、誰にも触れず」

孤独。僕もさんざん味わってきた物だ。だから、彼には共感できた。

「そんなある日、私は一人の少女と会った。汚れた17才の私に花を私に来たのだ。私は反射的に、少女の手を払った。少女はすぐさま帰っていった。しかし、翌日も、また翌日も、少年はやって来た。私は自然と少女と話すようになっていった」

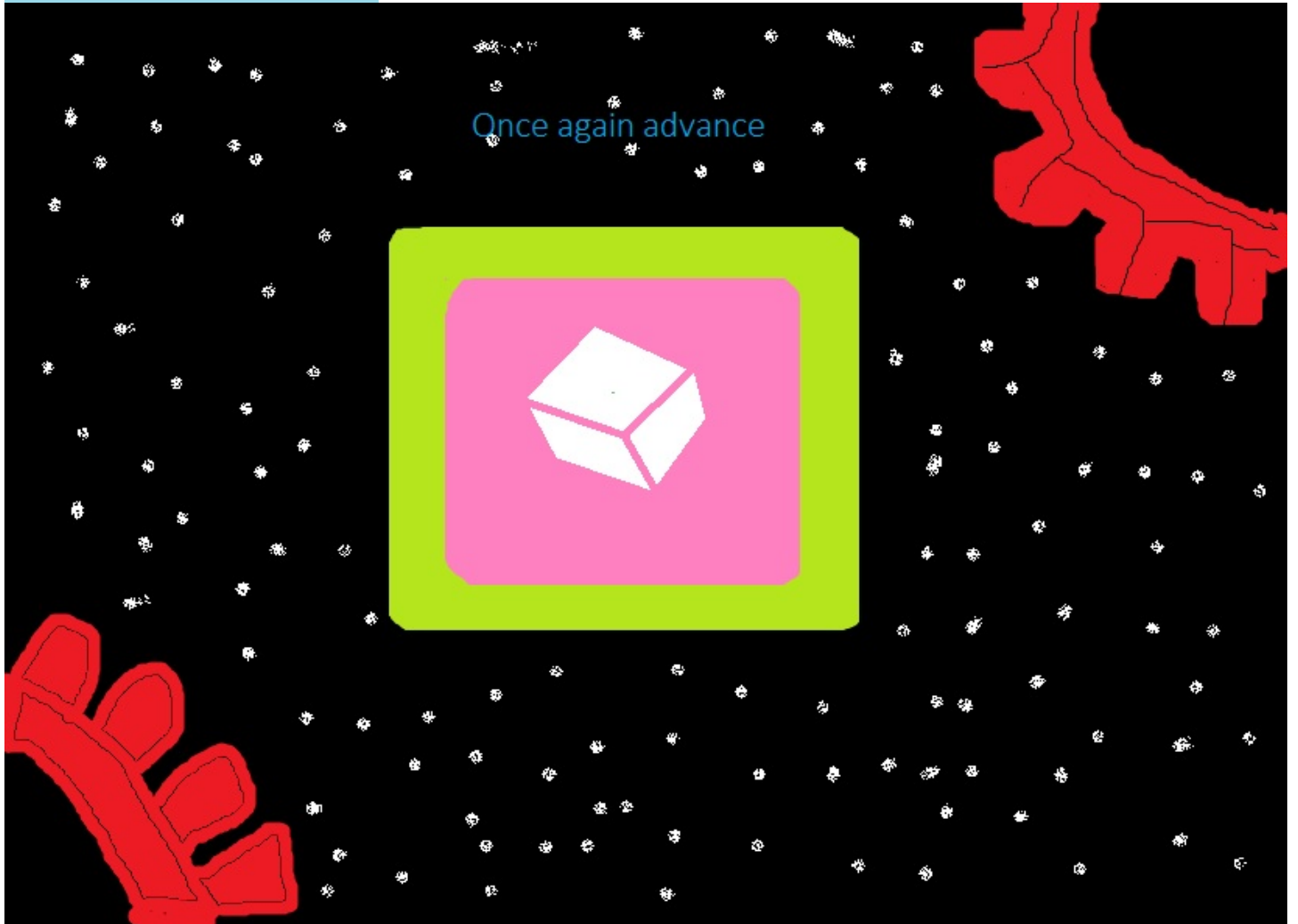
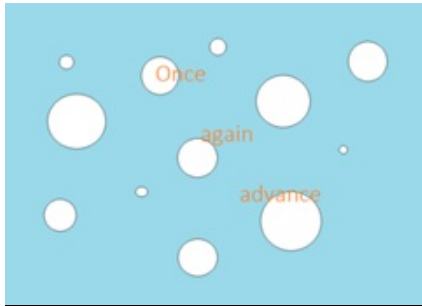
ロリコンじゃないのか？僕は少々疑問を抱いた。

「それからしばらくたった日、少々は少女はいつも通りやって来た。顔に大きなアザを付けて。私は問う。しかし少女は答えなかった。私は少女の家を突き止めて押し掛けた。そして、少女がいじめを受けていることを知った。翌日、少女は死んだ。過剰ないじめによる脳震盪だそうだ。

私は怒った。少女の学校に火を放った。そして決心した。こんな腐った世界を変えてやる、と」  
彼は話を終えたようで、口をつむった。

「貴重なお話ありがとうございました」

僕はそう言って、彼のもとを去った。空の太陽は陰ることを知らず、もはや暴力的なまでに照りつけてくる。暑い季節が始まろうとしていた。暑く、長く、そして悲惨な季節が。





ありがとうございました！！

[読み返し](#)

てみればまったく自分でもわけが分かりませぬ 最終話もうすこし時間かけたかった

END!!



## Once Again advance

<http://p.booklog.jp/book/62667>

著者：うよ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uyo-rate/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62667>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62667>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ